

## 第5部会

自然科学的な知見の意義を認めつつ、自然科学だけではスピリチュアリティが欠けている。そして、ベリーは先住民の自然と密接に関わったスピリチュアリティを評価する。しかし、ベリーの立場は先住民の宗教とは異なり、イアン・バーバーが述べているように、自然科学的宇宙論を物語として受け入れつつ、キリスト教のスピリチュアリティを融合させる道である。それゆえ、興味深いことに先の *The Universe Story* には、宇宙の歴史に続いて、人類の歴史が旧石器時代から現代まで連続と綴られ、古代文明の意義やアジアの諸宗教の意義も強調されるが、歴史的出来事としてのキリストは姿を消す。

ベリーはアメリカン・ドリームが約束した「素晴らしい国」は、ベリー自身の野原の原初的経験の場所であるようなアメリカの自然環境を「浪費された廃棄物に満ちた国」に変えた、と厳しく批判する。高速道路、工場、灰色の煙、廃棄物の山、これらは「臭い（くさい）」と、否定的に評価する。この「臭い」という感覚的・身体的評価は極めて重要であると思われる。精神と身体を分離し、精神・理性を重視する立場からすれば、感覚的あるいは感性的とも見なされる「臭い」という文明への批評は意味をなさないかもしれないが、人間と自然との繋がりへの回復を目指す次世代エコ文明においては感覚的・身体的評価、判断は極めて重要な指針を示している。

## 正義と配慮——近代カトリック世界における

## 「倫理」的活動の展開——

寺戸 淳子

本発表では、近代フランス・カトリック教会世界における倫理的活動の展開例としてルルドの巡礼世界をとりあげ、そこにみられる変化の意義を説明した後、近代カトリック世界という、より広い文脈における倫理的活動の展開との関係を考察するため、この事例の特徴を比較の軸として、教皇庁の社会教説の現時点での総括として二〇〇四年に「教皇庁正義と平和評議会」が出した『教会の社会教説綱要』の内容を検討する。

地縁的・職能的結合関係が解体された革命後のフランスでは、貧困層の出現という形で社会問題が発生した。人権に基づく公的扶助や連帯主義による解決を目指す共和派に対し、フランス・カトリック世界では、労働組合運動を中心とする男性による「社会的カトリシズム」と、女性が行う「伝統的慈善」による対処が試みられた。そのような動きを背景に一八七〇年代に始まったルルド巡礼では、上流階級の男女が主導する、貧しい病気の労働者を巡礼に伴うことで社会的結合関係の回復（貧困層の社会統合）とそれに基づく社会正義の実現をめざした「傷病者巡礼」が生まれ、傷病者巡礼を支援する奉仕者団体が組織された。この傷病者巡礼を実践する過程で、上流階級の男女が巡礼の現場に持ち込んだ社会的カトリシズムの討議的性格

と慈善の党派的性格が弱まり、「社会正義」や「共同体倫理」を問うことなく目の前の見ず知らずの「他者への配慮」を優先することが正しい態度として奨励されるようになった。

この展開を「男性の倫理的活動の変化」と捉えたとき、「公共空間における主体間の討議によって公正な社会正義の確立を目指す社会的カトリシズム」から「私的で社会調整能力をもたない慈善」への退行と見なされる可能性があるが、そのような観点とこの変化の意義を理解するのに、キャロル・ギリガン『もう一つの声』（一九八六年）が参考になる。ギリガンは、道徳理論の世界には「公的人格（理性・認識・自律・独立・自我の主権）」と「私的個人（自然・感情・養育・絆・他者に対する関係）」という二分があり、前者は「正義と権利」を重視する倫理的態度と、後者は「配慮と責任」を重視する倫理的態度と結びつけられてきたという。彼女は、「男性」という特殊な主体の経験を普遍化した結果、「家庭外」での活動を担う公的人格（正義と権利を重視する倫理的態度）のみが道徳的成熟として評価され、その陰で「家庭」を舞台とする「女性的経験」は私化され、配慮と責任を重視する倫理的態度は道徳的・認知的に未熟な段階とみなされることになったと主張する。この議論に沿えば、ルルドで男性参加者に起きた変化は、正義と権利を重視する倫理的態度から、配慮と責任を重視する倫理的態度への変化と考えられる。

社会領域におけるキリスト者の活動を支える倫理的指針と共通善のための対話の指針とすべく、教皇ヨハネ・パウロ二世の依頼によって過去の社会教説をまとめた『教会の社会教説綱

要』には、ギリガンの議論を思い起こさせる特徴が認められる。そこには、今まで社会教説に含まれてこなかった「家庭」についての章が設けられ、それが不適切と感じられることが「翻訳者前書き」でほのめかされている。『綱要』の全体を通して、家庭と愛、愛と責任が結びつけられ、正義に勝るものとして語られている。愛の政治的・社会的特質と「家庭の尺度に即した社会」の構築が説かれ、「社会や国家に対する家庭の優先」は、「家庭の視点」を人間理解に必要不可欠な「文化的、政治的視点として位置づける」ことを意味するといわれる。これらの記述は、ヨハネ・パウロ二世の反動的・家族主義と見なされる可能性が高いが、ルルドの巡礼世界に見られた変化とギリガンの議論を参照することで、「倫理」に関する新たな提言としての一面が、見えてくるものと考えられる。